OCC メディカル・カフェ　ニュースレター 『賢明な寛容:the wise patience』 第 25 号

2025 年 1 月　発行『お茶の水メデイカル・カフェ in OCC』

ニュースレター第 25 号をお届けいたします。 今年最初の号は樋野先生とスタッフの岡内が担当します。

『役に立つと思うときは進んでやる』 ～ 『OCC・カフェ』の原点 ～

樋野興夫（順天堂大学名誉教授、新渡戸稲造記念センター長、恵泉女学園理事長）

2025 年 1 月 25 日(土)『お茶の水がん哲学外来・メディカルカフェ in OCC（お茶の水クリスチャン･センター)』に赴いた。２組の個人面談の機会も与えられた。 『お茶の水がん哲学外来・メディカルカフェ in OCC』の主催者でもある『OCC 副理事長 鳩ケ谷福音自由教会牧師』大嶋重徳先生から、大嶋重徳先生と峰岸大介氏との往復書簡本『祈られて、がんと生きる』の『推薦のことば』を依頼された。約 120 ページの原稿を帰宅してから拝読した。 大いに感動した。

2025 年 1 月 20 日 私の名前が記載されていた読売新聞夕刊一面の『よみうり寸評』に【がん研究と人間探究を結びつけた『がん哲学』の提唱者として知られる樋野さんは、人が何かを成すにも 30 年を要する、―― 研究者としての自身の歩みも踏まえた実感という。 阪神大震災に続き、３月には地下鉄サリン事件から 30 年が経過する。―― 】とある。 大いい感激した。 想えば、2008 年 1 月 順天堂大学の病院で『がん哲学外来』を始めた。 2008 年の毎日新聞夕刊、読売新聞朝刊に『がん哲学外来』が紹介された。 新聞効果で『がん哲学外来』には、遠く県外からも来られ、すぐに予約で埋まった。 大きな驚きであった。
『がん哲学外来』は対話型外来が基本である。 それだけでも、患者の表情は明るくなる。 病状の進行を非常に知的に、かつ冷静に受け止め、残された時間をどう使うか、家族に何を残すか ということまで決めて来られる患者もいる。 その思いを受け止めてくれる医師は いないものかと見回した時、変わった看板を掲げている『がん哲学外来』は、心惹かれる存在として映るようである。 その姿に接し『がん哲学外来』の時代的要請を痛感する。

（次ページへ続く）

『がん哲学外来』のモットーは『暇げな風貌』と『偉大なるお節介』である。『暇げな風貌』とは、たとえ忙しくても、そのことを表に出さず、ゆったりとした雰囲気で患者と対話できる資質のことである。『偉大なるお節介』は、『他人の必要に共感すること』であり、『余計なるお節介』と『偉大なるお節介』の微妙な違いと その是非の考察が課題となろう。『医療者』に求められるのは『暇げな風貌』と『偉大なるお節介』であると実感する今日この頃である。『穏やかな心をもって接する ～ 柔和な心を引き出す ～』は、『お茶の水メディカル・カフェ in OCC』の原点でもある。 まさに『自分の力が人に役に立つと思うときは進んでやれ』(新渡戸稲造：1862-1933)の学びである。

新年、1月はカフェ始め。

ＯＣＣカフェにご参集くださる皆様、また本年もよろしくお願い申し上げます。

1月のカフェでは、私は大切な身近なひととの別れを経験した方、がんを克服またはおとなしくしてもらいながら、社会の中でご自分の道を力強く歩んでおられる方、両方抱えながら現在の生活を大切にしている方など6名のテーブルに参加させていただきました。

がん患者さんを囲む身近なひとは「第二の患者さん」であると言います。そこには患者ご本人の辛さと少し色合いの違う辛さが存在するのですが、患者さんの辛さを目の当たりにしているので、自分の辛さは口に出しにくいし辛い気持ちを持つこと自体に罪悪感を持ってしまうことがあり、ますます辛くなったりすることもあるのです。

大切な方と時空を異にしたあとにも様々な気持ちが残るもので、良かったこともそうでなかったことも、その内容やプロセスはお一人お一人みんな違うものですが、心に重いものを抱える場合があります。このような時に病気についてだけではなく、それに伴う多くの様々なことに対して、何でも安心して語り合える「場」が大切になるのではないでしょうか。色々な方とお話しをすることで、新たな視点を持てたり出来ます。お話を伺いながら、こういう「時」が積み重ねられるといつか時間薬も効いてきて辛かったことも含め「思い出」のようなかたちになってくれるのかなと感じました。

ＯＣＣカフェは誰かと出会い安心して語り合える貴重な「場」なのだと改めて深く思い、樋野先生語録で、私の気持ちを表現させていただくなら「大いに感激した」初春の会合でした。

がん哲学外来・お茶の水メディカルカフェ in OCC スタッフ
がん哲学外来・多摩川せせらぎメディカルカフェ代表　岡内泰子